
俺と彼女《あいつ》とクソな世界

来嶋 蓮

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺と彼女とクソな世界^{あいっ}

【Nコード】

N1842V

【作者名】

来嶋 蓮

【あらすじ】

ラルク・ジクハルト。現在17歳。

この世界に反発する、力なき少年。

フェリス・フィーリン

この世界を守る力ある少女。

幼馴染である彼らの物語はいくつも絡み合い
ある一つの結論へ

プロローグ

はてさて、皆は考えたことがあるだろうか？

こんなクソな世界いやだな。とか、

いやな世の中だ。とか、

とにかくこの世界自体に不満を抱いたことをだ。

俺はある。

こんなクソな世界はぶち壊したほうがいいと思うほどに。

しかし俺にはこの世界の理ことわりやら、なんやらを変える力はない。

俺自身が凡庸でどこにでもいるようなただの15歳の少年。

ただ昔、この世界をもうひとつの世界の浸食から守っている組織。

組織というか、国。

この世界は一つの国。なぜなら人が住める場所がそこしかないから。

その組織「天護遣」^{メシア}の最高位の兵士「聖護士」^{リヒト}の地位に居ただけ。

組織でいえば

アックスワイヤ

ナイト

ミラドル

士習い↓正士↓忠誠士↓聖護士

といった感じだ。

実は言うと聖護士の上には「完成護士」^{マスター}というものがある。

それは、この世界を直接守っている「巫女」^{みこ}の専属護衛といった

ところだろうか。

本当のことを言うと、俺は「完成護士」^{マスター}を目指していた。

しかし、目指していく過程で俺は真実を知った。

「天護遣」^{メシア}の実態を。

世界を守っていることには変わりはない。

でもそれをたてに、人々に圧制を敷き天護遣メシアの上の人間は至福に

生きている。

下界の民が荒んだ生活をしているのは知っている。

見て見ぬふりというやつだ。

俺はいやだった。

そして知らなかったことがたまらなく腹が立った。

俺はこのことを彼女^{あいつ}に言うか迷った。

もうすぐ、この世界を守る役割を担うこととなる「準巫女^{じゅんみこ}」の首位に居た

フェリスに……。

結局、俺はフェリスに「俺には荷が重すぎたんだ」と言っ去って行った。

自分がたまらなく嫌だった。

立った一人の女の子を救えない。

この腐った政治家共^{アホ}の駒にされることは分かっていたのに……。俺は逃げたんだ。

そして二年。俺は普通に過ごしてきた。

でも、またこんなクソな世界と目を向けなきゃならんとは。

第1章―1部

俺――ラルク・ジクハルトは強烈な光を……

「ふわぁ……」

――もとい、窓から差し込んだ太陽の光が瞼を照りつけ、俺は起きた。

「……寝みいな。今何時だよ？」

時計を見ると、時計の針は2時を指していた。

昼の2時かと思ったが、窓の景色を見る限り……朝だ。

深夜の2時の考えは放棄するとして……。

「時計の電池が切れたか……」

こりゃ買いにいかねえとな。とか思いながら家に置いてある木刀を持ち俺は家から出る。

俺の家は小ぢんまりしていて見る限り仮設住宅のようだ。

実際は俺が3ヶ月程度かけて作った自作の家。木を組み合わせて作ったただだから釘代はかかってない。

さて……。

俺は自分の足元を見やる。そこには……。

「みゃー」

猫がいた。こいつは俺がここに住み始めてからしばらくして現れた野良猫らしい。

俺に懐いてしまつて俺が出てくると現れ、俺が家に帰ると忽然と姿を消す不思議な野良の黒猫だ。

「なんだ？ お前まだここに居んのか？ こんなところに居ても楽しいことなんてないだろうに」

「みゃー」

猫は俺の背中から上り肩に乗る。

「本当にここがお気に入りなんだな……。ん？ そういや今日でお

前が現れてから1年くらいか」

なんかうまいもんでも買おうかな。などと思っている自分がいた。「さて、市場に行くか。今の時間は分からないし、電池も買わないといけないな。でも……」

俺は市場へと繰り出すこととした。

肝心の金は……ほとんど残ってなかったが。

市場は案外静かだった。

人通りも少なく、まだ店も始まっていないところが多い。

「開店前ってことは、10時にはなっていないんだな」

市場の店の開店時間は一律で午前10時。閉店も一律で午後7時だ。

「おう！ラルクの坊主じゃねえか！」

いきなり右から、バカでかい野太いおっさんの声が俺の右耳の鼓膜を破らんと……。

「バカでけえ声出してんじゃねえ！カINASのおっさん！」

「いやあ、すまん！でかい声が売りでな！」

「とりあえず、声のポリュームを落としてくれ」

「んじゃ、いつもどおりに」

でかい声が売りじゃなかったのか？と思ったのは内緒だ。

「カINASのおっさん。今何時だ？」

「今はまだ9時になったばかりだぞ。しかしこんな朝っぱらから何のようだ。坊主」

「うちの時計の電池が切れて正確な時間が分からない。って言ったところか」

「ほう。で、電池もついでに買いに来たということだな。だったらうちで買って行け」

「……いくら？」

「4個で200yen^{えん}だな」

「つまり、1個50yen^{えん}か……」

ちなみに所持金30yen^{えん}。

「いや、え、遠慮しとくわ……。今は、いい」

「何だ坊主？　もしかして金がないのか？」

「何のことだ？　いつ俺が金がない！　いつ俺の今の全財産が30yen^{えん}だと言った！」

「いや、自分で言ってるし……。金がないなら駄目だな。こっちだつて商売なんだ」

「くっ……。無念」

俺が落胆している時に、カイナスのおっさんが、

「お、そっういや今町長がクエストを出しているぞ」

「え！　マジで！」

俺はまるで太陽のような笑顔をした。（自分で言うと恥ずかしいものだ

「ま、詳細は町長に聞いてみるのがいいだろう」

俺は声音が変わり、

「報酬のほうはどうなってる？」

そう報酬。大事なことだ。もしこれが設定されたものなら少しやる気は落ちる。しかし、

「聞いて喜べ。『お金のみで交渉次第』だそうだ」

「なら安心だ。交渉は俺の得意分野だからな」

そう。交渉それはいかにこちらが有利な条件をたたきつけるか。相手を不利な状態に追いこみこちらの要求をのませる。

「んじゃ、行ってくるわ」

「おう。行つて来い」

俺はカイナスのおっさんの店から離れ、町長の家の方へ向かう。

「いいじゃねえか。詐欺師^{ペテンシ}の血が騒ぐね」

さあ、交渉の時間だ。

「いつ見てもバカでかい家だよな」

昔のうちの家には負けるがな

「ちわーす」

俺はノックせず町長の家に入る。

「はぁ！」

「うわつと！」

いきなり目の前から木刀を振り下ろされるがとつさに腰に差していた木刀を抜き、耐える。

「何しやがる！ キス力」

キス力・パリィ——この町長の息子で茶色の髪に整った顔立ち。平均的な身長で巷でキヤーキヤー言われている奴だ。

木刀の力が緩む。

互いに木刀を腰に戻す。

「おい、キス力」

「……………」

「つて、無視かよ！」

「そこに座って待つてろ。父様をつれてくる」

俺は何も言わず指定された椅子に座しておく。

「ベテンシ 詐話師に必要な力は、選語力、洞察力、全体把握力、記憶力そして運」

昔、父さんに教えられた最も重要なこと。

「いやぁ、待たせたようじゃなラルク」

前の扉から爺が出てくる。

「よお、爺さん聞いたぜ。今クエスト出してるんだって？ それ俺が受け持つてやるよ」

「お、ラルク。このクエストを受諾してくれるのか！ 一応、祠の調査何じゃがな」

「それより先に、報酬の交渉と行こうじゃないか」

「いいじやろつ。内容などあとでもよい」

俺は咄嗟に出ていた。

「じゃあ30000だ」

「なっ……………」

どうやら呆気を取られたようだな。

それに爺さんが言ったことは嘘だ。^{ブラフ}

爺さんは交渉の話をも持ち出した瞬間、一瞬、若干だが斜め上を向いた。

人間は嘘を言うときは若干斜めを向く。無意識にな。予想していただろう。

爺さんは内容の話をもう一度俺が持ち出すと持っていただろう。

「むむむ……」

「なんだ？ 無理なのか？」

「いや、さすがに高すぎじゃ……。30000は大きすぎる」
ほう。いい判断だ。

「そうか。なら仕方がない。なら半分の15000でどうだ」

爺さんは何も言わなかった。しかし爺さんの眉がピクリと動いた。高い額を提示しておいて、いきなり下げる。そうすれば安いほうがマシ。たとえ高くても安くすれば出す。

「まだじゃ。まだ高いぞ」

爺さん、粘るな……。さらに落とさせようってのか。

まあ、予想済みだが、

「仕方ない。なら10000だ」

「ぐっ……」

爺さん。あんたはもうこれ以上下げることとはできないぜ。

「まだ高いぞ。もう少し下げれないか？」

「爺さん。これ以上は下げれない」

「ぬ、どうしてもか？」

「というか、俺の出す本当の提示額はここ。10000だ」

俺はあえて手の内を晒す。

「な……。なぜ手の内を晒す？」

「ここでこの交渉は投了だ。あんたは俺の策略にかかったんだよ。^{ペテン}

これ以上交渉の提示額を下げることは無理だからだ」

「なぜだ？」

「おいおい。爺さん気づいてねえのか？ 爺さんと俺の信頼関係からの元付きでこうなってんだろが。」

爺さんは俺を信用しすぎだ。まあそういう風に洗脳してるのも俺だが、爺さんは10000を出すんだ。

これが三度目の交渉。毎度毎度あんたは俺から大金をむしり取られている。なぜか？

それは俺が巧妙な詐欺師だからだ。^{ペテンシ}

あんたは10000を払うっていう状況に陥っている。周りを見たらほうが いいぞ？」

「なんじゃ？」

10000払う状況。それは、観客だ。^{ギャラリー}

時間は既に9時30分を過ぎた。この時間から役所は開く。町長の家は役所も兼ねる。

そして今、俺は役所のだ真ん中で交渉している。

町長だつて政治家だ。^{アホ}政治家共は自らの保身しか考えれない。

つまりはここから値段を下げるとは信用問題にもかかわってくるわけだ。

爺さんは「祠の調査」と言っていた。この町にとって祠は神聖で邪気のない場。

ここの調査をしたいなら天護遣の調査員を出せばいいに出さない。^{メシア}

いや、出せない。天護遣^{メシア}を兵士も調査員を出せない。だからクエスト。

低額ですませようなど思うなよクソじじいが。俺はすべての政治^ア家が嫌いなんだ。

俺はこの状況を作るためにわざと高い額を提示し、時間を取らせる。それだけだ。

「仕方ない……10000で手を打とう」

やはり保身が第一か。少し失望したぞ。

「じゃあ、内容を教えてもらおうか」

爺さんの話をまとめるとこんな感じだ。

最近、祠から変な音、声が聞こえる。その原因を突き止める。
だそうだ。

俺は家に戻り身支度をして祠へ行くことにした。

言ってしまうば、この祠が始まりだったのだろう。
肩に乗る黒猫がこの祠に入ったことによって、な。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1842v/>

俺と彼女《あいつ》とクソな世界

2011年7月27日03時12分発行